

令和 4 年度学校関係者評価結果報告書

杉並区立天沼中学校運営協議会
会長 三石 初雄

第 1 はじめに

1 学校運営協議会（CS）によるアンケート調査の実施概要について

平成 21 年 10 月より開始された学校評価アンケートあるいは教育調査は、令和 4 年度の実施により、第 13 回目となる。当委員会、および、本校の学校運営協議会（以下、「CS」という）においては、本校の教育目標の実現や学校運営の改善、教育力の向上のため、生徒・保護者・教職員への教育調査が貴重な機会と考え、今年度も、実施方法・質問項目の修正・増減を学校と協議・検討の上、調査を実施した。

なお、令和 3 年度までは、マークシートへの記入方式にて回答を回収していたが、杉並区教育調査が Web 回答方式へ切替わったことを受け、CS の専用アカウントによる Google フォームにて回答を回収する方式をとった。さらに、令和 3 年度までは、区のエデュケーション調査の質問項目と本校の独自項目を加えて質問用紙を作成していたが、令和 4 年度については、本校の独自項目のみを CS による調査で質問することとし、その調査結果を学校に提出、杉並区教育調査結果と併せて、内部評価ならびに関係者評価の資料とすることとした。

（令和 4 年度の実施概要）

- ・調査の名称：令和 4 年度「天沼中学校“生活と学び”調査」

- ・質問項目についての修正点

①杉並区教育調査指標（生徒：14 項目、保護者：13 項目、教職員 14 項目）は削除

②評価部会の検討により修正した項目

【生徒用】No.17、No.20、No.21、No.25 実態に合うよう微修正を行った。

【保護者用】【教職員用】No. 26 微修正を行った。

- ・実施方法：Google フォームによるアンケート方式

生徒・保護者は 1～3 学年ごとに作成、教員と併せ、合計 6 つのフォームを作成した。

- ・実施日：回答の締め切り日は、生徒・教職員は 2023 年 1 月 11 日、保護者は 1 月 17 日に設定。

生徒＝12 月 19 日 1 校時前、各生徒用のタブレットにフォームの URL を送信。各教室にて回答。

保護者＝12 月 23 日、マチコミメール登録者（PTA で加入している無料の連絡網システム。PTA 加入保護者の任意登録制としている。）には、PTA から依頼文をメールにて配信。未登録者には封書にて配付し、封筒に入れて担任まで届けるか、学校の郵便受けに投函して回収。12 月 26 日、アンケート依頼が漏れていた方へ封書を準備。

なお、回答の依頼を 2 回マチコミメールで配信した。

教員＝12 月 19 日、封書にて調査の依頼状（QR コード記載）を配付。なお、今年度は非常勤教員、管理職を除く計 18 名に依頼した。

・匿名性を担保するための実施時の注意点

「杉並区教育調査実施時のチェックリスト」に準じ、次の点に留意した。

①回答用紙は「無記名」とし、「学年」のみを記入。なお、アンケートフォームにはすべて以下の文言を加えた。

※アンケートの匿名性について

- ・ Google フォームの利用により、どなたが書かれたかは特定できません。
- ・ 入力頂きましたデータは、天沼中 CS 委員に直接送信されます。

②一部、保護者用の書面での配付や回収に際しては個別の封筒を用いた。回収時は必ず糊付けやテープなどで封をするよう依頼した。

・回収状況（回収率）

	[令和 4 年度]	[令和 3 年度]
○生徒：1 学年	89.6% (69/77 名)	92.1% (93/101 名)
2 学年	83.7% (87/104 名)	93.2% (68/73 名)
3 学年	92.0% (69/75 名)	86.8% (92/106 名)
全学年	87.9% (225/256 名)	90.4% (253/280 名)
○保護者：1 学年	48.0% (37/77 名)	93.9% (93/99 名)
2 学年	46.2% (48/104 名)	94.2% (65/69 名)
3 学年	68.0% (51/75 名)	88.3% (83/94 名)
全学年	53.1% (136/256 名)	92.0% (241/262 名)
○教 員：	94.4% (17/18 名)	84.0% (21/25 名)

令和 4 年度の CS による調査実施にあたり、回答頂いた生徒、保護者、教職員に協力の御礼を申し上げたい。調査結果ならびに自由記述欄に寄せられた意見に真摯に向き合い、学校と共に教育活動・学校運営の改善に活かしていきたい。

今後も引き続き、『メビウスだより』などで説明や見解をフィードバックする他、CS 会議や四者（教師・PTA・学校支援本部・CS）の研修・懇談会等の中でも議論していくこととする。

2 次年度以降の CS によるアンケート調査実施の課題点について

Google フォームでの Web 回答方式への変更に伴い、全体的に回収率の低下が危惧されていたが、生徒については例年通りの回収率を得られた。タブレットの使用が定着化していること、担任教諭による生徒への指導が適切であったこと、などが推察される。

保護者については、PTA の協力を得て、マチコミメールを利用してアンケートフォームを配信した。さらに計 2 回、メールを通じてアンケートへの回答の協力を求めたが、回収率は 53.1%に留まった。なお、11 月に Forms にて実施された「杉並区教育調査」も同様の方法で（マチコミメー

ルを利用して配信) 実施されたが、こちらの回収率は 71.4% であった。

考えられる理由について、次の点が意見として挙げられた。

- ・ 11 月に杉並区教育調査が実施されていたため、同様のアンケートと混同されたのではないか。
- ・ 緊急性を要する「杉並区メール配信(学校)システム」と異なり、「マチコミメール」での配信内容は重要性を持たないとして、見過ごされていたのではないか。
- ・ 推測ではあるが、保護者の心情として、「学校に不満があり意見を述べたいから回答する。」「特に今の学校生活に問題がなく、肯定的であるからこそ回答の必要性を感じない。」などが考えられる。

これらの意見も参考に、次年度の実施時期ならびに実施方法については、小中連携校である、沓掛小学校、天沼小学校でのアンケートの実施や保護者への協力依頼の方法、回収率の現状などの情報を得ながら検討を重ねる必要がある。

第2 評価

1 評価の方法

当委員会は、本校の本校校長を除く CS 委員 10 名に、同会以外の評価者として、本校の連携小学校運営協議会会長である高橋武郎氏〔天沼小〕、近藤真司氏(代行：石田幸代会長職務代理)〔沓掛小〕、本校の卒業生で剣道教室師範や保護司など地域活動に幅広く尽力されている鶴岡隆志氏を加えた 13 名で構成をした。

第 1 回学校関係者評価委員会(令和 5 年 2 月 6 日(月)開催)では、松尾了学校長より、以下の資料(資料 2・資料 3)を提供、調査結果の報告と自己の分析・考察の報告を受けた後、委員による質疑応答、意見交換が行われた。

第 2 回委員会(令和 5 年 2 月 28 日(火)開催)では、第 1 回委員会の討議を踏まえ、まとめられた「評価報告書(素案)」に沿って、引き続き検討、その際、第 1 回委員会で触れられなかった資料 5(自由意見記述のまとめ)についても取り上げ、意見交換を行った。「評価報告書(素案)」の修正・加筆事項を確認し、修正した評価報告書を当委員会として承認・提出することとした。

なお、当委員会の各会議の内容は、検討資料・事項の性質を考慮し、非公開とする。

《配付資料》

資料 1 学校自己分析(「自己評価書」): 学校長作成の報告書

資料 2 教育調査評価結果(カラー): いくつかの質問について回答分布を抜き出し整理した資料、校長作成

資料 3 三者の相関(カラー): 全回答のうち、高肯定率、肯定回答の高上昇の項目に色付けした資料、校長作成

資料 4 回答の前年比資料(カラー): 2・3 年生について前年の類似質問都の経年変化を纏めた資料、校長作成

資料 5 自由記述意見のまとめ → 第 2 回評価委員会後、回収・破棄。

2 学校の『令和 4 年度「教育調査」について』（自己評価書）への評価

（1）生徒に対する分析・検討

ア 肯定率の平均の大幅な増加、否定率の平均の減少

生徒全学年の肯定率の平均は、“生活と学び”調査（以下、「CS 調査」という）が 73.2%、杉並区教育調査（以下、「区調査」という）が 66.6%となっており、ともに昨年度の 60%より大幅に増加している。一方、否定率の平均は CS 調査が 10.3%、区調査が 11.4%であり、こちらは昨年度の 14.9%より減少している。自己評価書の「1-（2）肯定率の平均、（3）否定率の平均、（4）肯定率、否定率の高低」の中で、令和 3 年度に続き、調査結果が好転している要因として、「多くの教育活動が予定通り出来たこと、教員と生徒の関係構築が円滑であったこと」と説明されている。肯定率が 80%以上の質問項目を領域ごとに列挙してみると、生徒たちの学校生活並びに教育活動全般について満足度が高いことが伺われる。

・学校経営・学級経営

CS_2：学校は、私たちに学校の教育目標（自主・自律・共生）について話をしたり考えさせたりしている。

CS_12：私は、学校生活や友達との交流を楽しんでいると感じている。

CS_20：フレンドシップスクールをはじめ、行事などの機会の学級づくりの取り組みは、良い友だち関係をつくるのに役立っている。

区_1：先生はクラスのみんなが分かり合い、協力し合えるようにしてくれている。

・いのちの教育

CS_10：学校は、いのちの大切さについて、教えてくれる。

・安全指導

CS_6：学校では指導や訓練を通じて、地震や火事など、様々な危険を予測し、避けるための知識や考え方について学んでいる。

CS_14：学校は、学校や地域での生活上のトラブル・危険を避けるための指導やルール作りについて適切な取り組みをしている。

・生活指導

CS_16：学校の生活のきまりやルールは納得できる。

・部活動

CS_17：学校の部活動は、自分の成長や学校生活を充実させることに役立っている。

・特色ある教育活動

CS_20：書道・華道・茶道、和楽器（箏・三味線）、落語などの体験授業は日本の伝統文化理解に役立っている。

・進路指導・キャリア教育

CS_16：職業学習、職場体験、上級学校訪問などのキャリア学習は自分の生き方や将来を考えるのに役立っている。

・学校行事

CS_10：学校行事（運動会、学芸発表会、音楽発表、展示・舞台発表、校外学習など）が充実している。

・ICT 教育

区_8 学校は、授業において電子黒板やデジタル教科書等を活用している。

学校が、教育目標に基づき、いのちの大切さを教え、生徒たちにとって安心・安全で居心地がよい学校づくりに努めていること、部活動や学校行事等の特別活動にも工夫を凝らしながら注力していること、かつ限られた制約の中で、ICT 教育にも果敢にチャレンジしていることなどが読み取れる。昨年度の外部学校評価書では、評価委員の見解として「コロナ終息の兆しが見えない今、コロナ禍で生徒が不可避に受けた不安・疑問を抱えていることを念頭に、注意深く子どもたちの変化を見守る必要がある。」と記していた。

昨年度よりも一層、生徒たちが日常の学校生活を少しずつ取り戻していることへの安堵感とともに、コロナ対策の工夫をしながら、さらなる教育活動の充実に努めておられた先生方や職員の方々に、改めて心から敬意と感謝の意を表したい。

イ 昨年度と比較した生徒の肯定率の差：著しく向上した項目について

「1－（6）昨年度と比較した生徒の肯定率の差」の中で、15%以上上昇した項目についての分析に関し、学校が講じた改善策について、当委員会で意見が挙げられた項目について述べたい。

これらについては、学校の努力をよりの確に把握するとともに、引き続き、継続して行えるよう CS としても応援をしていきたい。

・「CS_2 教育目標の意識づけ」27.5%↑ 「CS_3 教育目標の日常生活での意識化」16.6%↑

昨年度、過去3年間下降傾向が続いていることを鑑み、「常に教員自らが「教育目標」を念頭において教育実践を行う習慣づけが必要であろうかと思う。例えば、道徳や特別活動、学校行事などの指導案・企画案作成の際に教育目標との関連付けを行い、生徒にも意識化させることなど、日常面での工夫で改善できるものと思料するので是非、検討されたい。」との意見を述べさせて貰った。

今年度については、各教員が、指導計画の要項等に、教育目標「自主・自律・共生」を明記すること、学校長の朝会時の講話で、教育目標のどれに関する内容かを必ず示すこと、等の工夫を行ったという。それら取り組みの効果が反映されたものと考ええる。

・「CS_16 キャリア教育（職場学習・体験・上級学校訪問）」25.8%↑

今年度の職場体験については、保護者に協力、配慮を頂きながら実施した。一昨年まで、学校が体験先を探して提供していたがこれを転換した。生徒や保護者が一緒に考える機会をもち、体験先を見つけ候補を挙げてもらった。保護者からは多少の批判もあったようだが、実施後、今回の取り組みに対して肯定する声も少なくなかった。今後も、保護者については、教育活動の趣旨を理解いただけるよう丁寧な説明を行い、ならびに諸事情により対応が難しい家庭についてのサポートもぜひ心掛けていきたい。

・「CS_15 不登校の予防・効果的な支援の取り組み」15.7%↑

不登校生徒への対応が具体的にどのように行われているのかは、表に見えにくいこともあり、かねてより低い肯定率が続いていたが、今年度の同「支援の取り組み」についての肯定率は2、3学年ともに約10%上昇している。

細かくデータをみると、「どちらともいえない」「回答不能」も他の質問項目と比べると多いが、学校の取り組みに理解を示す生徒が徐々に増えてきているのではないかと、生徒たちの「不登校」への認識が変わりつつあるのではないかと、という意見が語られた。生徒の自由記述意見(3年 No16)にも、そのことが推し量られる内容が書かれていた。

内部評価では、3学年における学級担任2人制など、組織編成の見直しにより、学校内・学校外関係諸機関ともに、より関わる者が多くなり、チーム支援の動きが良くなったのではないかと考察している。その効果故か、本校では、登校渋りや不登校傾向にある生徒への支援が厚い印象を受けるという声が複数の委員から語られた。生徒たちには、行事のみに参加をする生徒や教室外登校を行っている生徒について、「勇気を持って学校に来ているんだよ。」との説明をしているそうだ。担任など特定の教員だけでなく、職員や支援本部も含め、学校全体で温かく迎え入れる雰囲気を作っているため、生徒たちも自然に同じように振る舞えるのではないかと。

行事の班づくりの際も、積極的に久しぶりに登校した生徒を誘い合う風景を見かけるという。そのような生徒たちの考えが、保護者にも伝わっていると思われ、保護者の調査結果(CS調査_16)も上昇している。

なお、教員からの自由記述の中に、「不登校の生徒に担任は精一杯接している。登校支援など家に迎えにいくなど支援していただけると改善に結び付くと思います。」との意見があった。

連携小学校では、朝の登校時の警備員、交通指導員の方の声かけや見守り、校長室登校などの教室以外の居場所づくりのケースもあると伺った。人とのふれあいで得られる安心感を生む環境づくりが効果的であると考えられよう。本校で具体的にどのような立場の人が、どのような支援を行うと良いのか、話し合いの場が設定できると良いと思う。短時間の介助ボランティアの雇用や、家に行くことは出来なくても昇降口で出迎えるなど、工夫の可能性を更に探っていく必要がある。

ウ 昨年度と比較した生徒の肯定率の差：減少あるいは伸び悩んだ項目について

「1－(6) 昨年度と比較した生徒の肯定率の差」の中で、1%以上減少した項目についての分析に関し、当委員会で見解が挙げられた項目について述べたい。

・「区_13 地域行事の参加」1.4%↓

要因は、「行事」＝お祭り、イベントであると生徒は認識、コロナ禍の影響で地域事業の規模が縮小傾向にあり、参加の呼びかけも著しく減っている。致し方ない現状であるが、質問項目を「地域活動」とすると、結果は変わる可能性もあるとの意見が出された。

・「CS_24 ボランティア活動への意欲」1.8%↑

昨年比は弱増しているものの、3年間伸び悩んでいる。学校としては、今後の周知や指導で改善を図ることができると見立てており、CSとしてもアイデア等検討できれば良いと考える。

一方で、「伸び悩んでいる」という表現は適切でないとの意見も出された。

本校生徒には、毎年約80-90名)近くの「杉並区中学生レスキュー隊」志願者がいる。校内の防災学習や、地域の防災訓練にも熱心に参加しているが、もしかしたらそれらの活動を「ボランティア」と認識していないのではないか。その他、「AKA（天沼小・沓掛小・天沼中）の小中連携授業で、小学生に寄り添い気遣う様子が見られた。」、また「卒業生が、学生ボランティアとして天中生のパワーアップ教室での学習補助を手伝ってくれた。」或いは「小学校で支援本部のお手伝いを行っている。」など、天中卒業生のボランティア意識についても複数意見が出された。

ボランティア活動などの社会体験活動は、学校教育の中に位置づけられており、その教育的意義は、「自己理解」や「他者理解」、「自分自身を尊重できる自己肯定感」「社会の中で役に立つことが出来るという実感＝社会的有用感」を体得してもらうことにある。

校長から語られた、小中連携授業の生徒の振り返りのアンケートでは、「自己肯定感が上がった。」「先生たちのお手伝いのつもりで行ったのに自分は何もできなかった。」「小さい子との関りの難しさを感じた。先生はすごいと思った。」等、他者を慮り自分を見つめなおす機会となっていたことが伺われた。

おそらく生徒たちにとって、学校での教育活動とボランティア活動の区別は特段意識されていないのと思う。特別な人に、特別な活動をすることが「ボランティア活動」だと思っているのかもしれない。しかし、彼らには自然にボランティアマインドが醸成されており、彼らの活躍の場づくりを、地域とともに工夫出来るよう、CSも協力をしたいと考える。

（2）保護者に対する分析・検討

ア 肯定率の大幅な増加について

「1－（2）肯定率の平均、（3）否定率の平均」の中で、令和3年度と比較して、CS調査・区調査ともに肯定率の平均が増加している要因として、「PTAの活動協力により学校の情報がより伝わりやすくなったこと、学校公開の機会が増えたこと、生徒へ「保護者に学校生活を伝えるよう」意図的に伝えた効果、キャリア教育において、生徒と保護者が話す機会が増えたこと、の結果であると分析している。昨年度の評価委員会では、生徒と保護者間の調査結果の相違について検討されており、学校には、「保護者が学校に関心はあるが手段が乏しいことを十分理解し、共に子どもの成長・発達を願う者としてコロナ禍での関係構築に尽力いただきたい。そのうえで、自己評価の課題として挙げている『保護者との情報共有と相互理解』について方略を検討いただきたい。」と言及している。この点について、十分改善されたと考えられる。

イ 肯定率50%未満、否定率が20%以上の項目について

「1－（4）肯定率、否定率の高低」の中で、肯定率50%未満、否定率が20%以上の項目のうち、気になる項目を挙げた。

・「区_6 学習状況評価の適正」

昨年度も 51%と決して高い数値ではなかったが、さらに 1.6%減少している。「評価方法と基準について、学校から保護者へより一層の理解を得られるように説明と周知を行う必要がある。」との考察を行っており、昨年度に引き続き、「学校説明会、教育課程・評価・評定説明会、保護者会、個別の3者面談時などで、適切な説明がなされていたか。出席出来なかった保護者にも、その情報が伝わる方策を用意していたか。」の点について、改めて検討されたい。

この「適切な説明とは何か」について、活発な意見が出された。

現在学校が行っている説明と、保護者が求めているものが違うのではないか。評価・評定説明会での説明はある程度理解している。だが、「如何にしたら、自分の子どもの成績が向上するのか？」を個別に説明してほしい（例えば、塾の三者面談のようなものを求めている）というのが、保護者の本心なのではないか、との意見があった。

ただ、学校としては、生徒にも保護者にも、評価について「必要であれば説明に応じるので個別に問い合わせしてほしい。」と伝えているという。難しい課題であるが、少しでもこの食い違いが埋められるよう、学校には努めていただくことは可能ではないだろうか。例えば、現在取り組んでいる「おしゃべりウィーク」、CSと保護者ならびにCSと教員との懇談会等を活用し、保護者との対話の機会づくりなど、現在実施していることの工夫や改善が期待されているのではないだろうか。

(3) 教職員に対する分析・検討

ア 肯定率平均の変動について

肯定率の平均の増加、否定率の平均の減少は、調査対象を授業を行っている教員としたためとしている。

イ 昨年度と比較して肯定率が減少した項目について

- ・「CS_10 道徳の授業」1.1%↓
- ・「区_10 教科指導の小中接続性」2.4%↓
- ・「区_13 特別支援教育・個別指導計画の作成・実施」12.7%↓

「道徳の授業」については、次のような意見が出された。本校卒業生のみならず、高校の中退率は必ずしも少なくない。中学校期は、高等学校への次ステップに進む前の大切な時期である。その点で、例えば、未来を生きぬく逞しい心、豊かな心の育成に道徳の授業を活用することも考えられるのではないか。

ウ 「主体的・対話的な深い学び」を目指した授業改善の必要性について

昨年度より、杉並区教育調査指標の中には、新たな学習指導に関する項目が追加されている。昨年度の調査結果では、「個別最適な学び（指導の個別化）」「個別最適な学び（学習の個性化）」については教職員の肯定率に比べ、生徒の肯定率は低めとなっていたことに対し、自己評価の中で、「教科横断的に授業研究を行う雰囲気と意識を高め、指導と評価の一体化をさらに推進する。」との言及があった。

今年度の生徒の調査結果では、「区_2 学習の個性化」は昨年度より 18.6%増加、「区_5 協働

的な学び」も 5.3%増加しており、改善に努力されている。「区_3 指導の個別化」は変わらず、「区_4 探究の学び」は微増といった結果であった。

松尾校長より「授業改善への気運は醸成できたと思う。校内研修として、期間を 2 週間ほど長めに取り、4 人程度一組で異なる教科の教員が班を編成、それぞれの授業を見学、感想を共有し合うという取組みを行った。1 度しか実施出来なかったが、「継続して行いたい」との声が教員からも挙がっているので引き続き実施したい。」との説明があった。

また、中学校での学習指導については、以下の課題点が挙げられた。

- ・教科の専門性や定着化のスキルは長けていると思うが、深い学びを取らせる、視線や表情の使い方も含めた授業への惹きつけ方などのスキルは、不足しているかもしれない。
- ・AKA の授業見学時に、必要な観点を決めておくと、効果的に見学できるのではと思う。
- ・進路に関わるので、学習内容を終えることが先決になりがちで、正直なところ、主体的・深い学びに重きを置く余裕がない。
- ・個別最適な学びについては、生徒たちは、個別指導の機会の足りなさを感じているのではないかと考えられる。授業外に個別指導の時間を設けるとなると、働き方改革との兼ね合いもあり、対応が難しく工夫を要する。

これらの課題を克服すべく、次年度への学習指導力向上に努める姿勢を大いに評価する。

先生方の努力が生徒の学業発達に繋がるよう大いに期待するとともに、CS としても、是非とも応援をしたい。但し、授業研究への教師の意識・意欲はあるが、学習や研修会などに参加する時間が取れない現状もあると伺い、非常に憂慮している。ぜひこの点を改善できるよう、校内研修の工夫とともに、貴委員会に工夫をお願いする所存である。

《令和 4 年度：生徒および教員の質問項目と肯定率》

観点：個別最適な学び（学習の個性化）

区_2 授業では、学習を進める方法やペースを、自分で決めながら学んでいる。

（生徒：59.7% 教員：83.3%）

観点：個別最適な学び（指導の個別化）

区_3 授業では、自分の得意なところを伸ばしたり、苦手なところを少なくしたりできるように、個別に教えてくれている。

（生徒：48.9% 教員：88.9%）

観点：探究の学び

区_4 授業では、自分の興味に基づいて問いや課題を立てて学んでいる。

（生徒：52.8% 教員：88.9%）

観点：協働的な学び

区_5 授業では、自分が必要な時に、必要な仲間と協力しながら学んでいる。

（生徒：74.9% 教員：94.4%）

第3 結語

今年度天沼中学校で実施された教育委員会「教育調査」ならびに生徒/保護者・教師へのCS独自の調査結果の全体的傾向は、生徒の生活と学びへの肯定感と学校教育活動の改善の兆しを明確に示していると考ええる。

それは、不登校者や生活指導等への個別的な対応だけでなく、学級運営を複数担任で取り組み、中学校ならではの学校生活を学校行事や伝統文化の教育等の“特色ある教育活動”への教員の取り組みと、「年度末反省」等の校内分掌の的確な教育活動が機能しているからであると思われる。CS独自の調査(自由記述)で、ある保護者は「ワクチンもなかった3年前、どれだけの決意で先生方が教壇に立ちつづけてくれていたのか」を再認識すべきであるとして書いていたが、今回の諸調査結果やCS及び学校関係者評価委員会内での意見交換では、その教師と学校の教育活動の取り組みを確認することができるのと同時に、それらの成果が現れていることについても各委員は共通に確認できた。これらの取り組みと成果は、管理職の学校運営方針と教育課程編成におけるリーダーシップの重要性を示唆している。それとともに、「校舎は古いかもしれないが、周りには四季を通じて草花が咲き乱れている。こうした環境は、途切れることなく隣のさざんか教室ともつながっており、生徒の心のオアシスとなっている」と保護者が指摘しているように、管理職・教育職だけでなく主事さんや職員等の総合力であることも確認しておくことが必要であろう。

と同時に、このような今年度の全体的評価とともに、いくつかの課題・改善していきたい観点があると考えられるので、その点について記しておきたい。

1)「誰もが当事者として教育にかかわる環境づくり」

生徒用「質問 box」をはじめ「おしゃべりウィーク」の対象を生徒だけでなく保護者にも広げたり、保護者会や教育課程説明会、授業公開等を多く開催し、生徒と保護者との「距離」が縮まってきている。ただ、まだその受け取りの「食い違い」を解消するまでにはなっていないように思われる。話合いの機会や話し合う材料も整いつつあるが、その間での「食い違い」の存在を知り、各人の想いに意味・背景があることにも触れあえるような場面・居場所を創出することが求められているのではないだろうか。それは「杉並区教育ビジョン 2022」にいう「この10年、家庭・地域・学校(園)の協力のもと、誰もが当事者として教育にかかわる環境づくり」とも重なってくる。このことは、さらに天沼中学校の改築という節目となる課題に、生徒・保護者・地域の人々・教育関連機関がどう関わり、想いをつなげ具体化するかということでもあろう。

2)「誰ひとりもみかぎらない、自分がいていい居場所がある」学校づくりと校内研修

天沼中学校に限らないことではあるが、特別な支援が必要な教育活動・インクルーシブ教育に関する取り組みの弱さが調査結果から見られる。これは当該学校に適応指導教室の有無も関わるがそれだけではないだろう。本校では不登校や登校渋りも生徒の人間関係づくりと保護者と教師の環境づくりで改善してきていることは確かだろう。とはいえ全国的な不登校・登校渋りは増加し、中学生・ヤングケアラーの存在や新たに海外帰国者や外国籍の生徒が多くなっている現状も視野に入れておく必要がある。「学校登校への圧力」「学校学力への圧力」「同調圧力」について無視できない中で生徒は生き生活している。「中学校を卒業したら終わり」ではなく、高校中退者、大学中退者、引きこもりのことも視野に入れた中学校教育の在り方を含め模索することが期待されている。

特別支援教育・インクルーシブ教育、不登校支援、学力向上支援、キャリア教育等がバラバラにあ

るのではなく、そこを貫ぬく総合的な教育活動＝教育課程マネジメントとその教育実践が求められている。現在、校内研修の一環で授業観察が行われているが、そのような教師の専門性を生かせる校内研究（研修）の充実・改善と研究推進強化が求められている。この学内課題と同時に、学外の司法や福祉等、教育支援機関との連携強化も待ったなしの課題となっているのではないだろうか。

3) 地域での連携づくり

天沼中学校では、地域防災ボランティアとしての「杉並区中学生レスキュー隊」が活躍しており、その活動も区内で知られるようになってきている。また、生徒会活動として始まっているペットボトル・キャップ回収も、町内会の全面的なバックアップの中で継続されてきている。

ただ、地域教育推進協議会の活動として行ってきた「天チャリ」活動の休止、ペットボトル回収活動の盛衰等もあり、今日のボランティア活動としての取り組みの実情とその在り方、学校と地域との協力関係について検討が必要な段階となっているとも考えられる。すでに学校としての改善検討を開始している状況ではあるが、生徒のボランティア意識と学校の教育方針との関係に配慮しながら、地域の教育支援団体との調整等を進めていくことが課題となっているのではないだろうか。

ところで、今回、天沼小学校ならびに杳掛小学校の CS 委員も含めた委員会編成としたが、このことは各 CS の取り組みの具体とその考え方について意見交換する機会でもあった。この機会が本 CS 活動を相対化する上で有益であったことを鑑み、CS 同士での交流（これまで開催してきた三校合同 CS 会議等）や、教職員・学校と CS、学校支援本部等との交流・連携の新しい在り方を探ることも課題となっているのではないだろうか。

4) 教師の専門性と意欲を発揮できる教育行政からの支援

GIGA スクール構想の導入と展開が新型コロナ蔓延下で行われてきた。教職員・学校ではこれまでにない課題に向かい克服しつつある。しかし、現実的には全生徒に貸与されたタブレット PC の操作とその教育的活用とトラブルに対する対応の遅れと不十分さに対して、教職員は苦心し挑戦し続けている。近年の特色ある教育活動支援の少人数化加配や部活動支援、SSS 配置等での支援が行われはじめているにもかかわらず、それは学校現場では「火の車」状態は収まっていないと思われる。例えば「教材研究」に力を入れたいという教師の願いが実現できるよう、CS はこれらの現実の一部分について、何かできることはないかと苦慮してきた 1 年であった。

その一環として、教育委員会への「お願い」と懇談機会設置を昨年一昨年と提出してきた。今年度それが教育委員会のご理解で懇談会が実現し、いくつかの改善のお願いも具体化できた。ここで改めてお礼を申し上げるとともに、引き続きのさらに強力な教職員・学校への支援をお願いしたい。CS は、校長先生との随時の懇談等を通して、PTA・保護者や学校支援本部と協力しながら、できることを探っていきたいと考えている。

つきましては、財政逼迫の折、また懸案課題が山積みで多忙化の渦中にあると思われるが、次の 2 点についての検討をお願いしたい。1 つには、今年度実現できました懇談会が極めて有益であったことを鑑み継続をお願いするとともに、年一回の杉並区内 CS 連絡会等での意見交換会充実策の検討、2 つには個々の学校教育活動支援のための財政的支援（外部講師・指導員派遣経費増額と等）と教職員配置（SSS 増員・増時間）による支援の検討である。

以上